

二〇一九年二月二十九日

山裾に波打つ銀の枯尾花  
丸窓を額縁として冬紅葉  
踏みしだく深き落葉や深山道  
石庭の砂紋際立つ冬日かな

宏 虎  
菜 々  
みづき  
はく子

二〇一九年二月二十八日

すれ違ふ人に湯の香や帰り花  
元氣よく駈くる園児に銀杏散る  
枯葦の隙間に光るささら波

素 秀  
ぼんこ  
愛 正

二〇一九年二月二十七日

朴落葉拾ひて仰ぐ空青し  
目鼻なき石の仏へ紅葉散る

うつき  
菜 々

二〇一九年二月二十六日

京の寺巡拝によき紅葉晴  
晨朝の牛舎に白き息満つる  
時雨晴れ土匂ひたつ花時計

はく子  
素 秀  
なつき

村と村繋ぐ大橋谷紅葉

小 袖

紅葉見に来て花嫁の列とあふ

せいじ

激つ瀬に波乗りのごと落葉過ぐ

智恵子

二〇一九年二月二十五日

冬ぬくし古き標が町おこし  
大原女の頭に籠や紅葉坂  
一夜にして黄落道を埋めけり  
教皇の声被爆地に冬ぬくし  
色変えぬ松を震はせ宮太鼓  
四辻に来て渦を巻く落葉かな

せいじ  
智恵子  
ぼんこ  
せいじ  
なつき  
うつき

二〇一九年二月二十四日

埋火や干物は網に反り返る  
美人絵馬重なりあへる神の留守  
晩学のスロライフや卵酒

愛 正  
ぼんこ  
みづき

二〇一九年二月二十三日

旅小春丹の橋渡り磴のぼり  
厨にも欲しき勤労感謝の日  
病院を辞すシリウスを真向かいに  
八峰の一隅照らす冬日かな

菜 々  
満 天  
うつき  
愛 正

毎日句会みのある選・二〇一九年二月一日